

# 阿妻一直の「札幌焼・盤溪窯」 生い立ちの記

⑦

## 独立時代（出会い） 一直焼・八軒窯（その3）

一九八一年に独立し、初窯は思い通りにいかなく、精神的に落ち込んだ気持ちを修行時代の初心の気持ちに改めまして、二回も三回と窯を焚き、併せまして釉薬の試験も繰り返しながら八軒窯の持ち味になるオリジナルな釉薬も開発していきました。

素地となります粘土は、当時は野幌の土（通称・野幌粘土）を使用しました。野幌とは地名で、江別市野幌のこととして、一九九五年（明治二十八年）頃から野幌周辺に増え始めました赤煉瓦や土管の工場が主原料として使われた土です。

煉瓦や土管の原料として優れていたのですが、陶器での僕の目的とする焼成温度は、一二五〇〜一二八〇度くらいの高温でして、野幌土の適正温度は、一二〇〇〜一二三〇度でしたので、焼成の高温に耐えるように、

北海道内の高温に耐える粘土（通称・虹田粘土）をブレンドし、素地となる粘土が決まりその素地に合う釉薬の試験を繰り返しました。

私の修行先が岩見沢市の「こぶし陶苑」と秋田県の「なら岡焼」です。双方の窯元のオリジナルであります。青い色の「海鼠釉」が始めの釉薬としてスタートしました。釉薬の割合とかは、窯元からは教わりませんでした（秘伝）。

自力で釉薬を焼いた灰（窯灰）や木の灰（木灰）に、色々な原料を割合比率を変えながら手探り状態でオリジナルな「海鼠釉」を追求していきました。「海鼠釉」に限らず平行しまして、天然の「白萩釉」とかの釉薬も追求していきました。

釉薬も大体安定し、窯も安定してきた頃、知人や友人も増えてきました。

皆さんの目に留めて頂けるようになり、お客さんも出来はじ

め広めていただけるようにもなりました。

初窯から色々な出会いがありました。私の転機といえます。か、変わり目ともいえる心に残っている出会いがあります。

一九八七年（昭和六十二年）のお正月、「琴似神社」への元旦参り、家族総出でいつものようにお参りしました。帰りにいつも

気になっていた新しく出来た喫茶店に寄ることにしました。

その喫茶店は、JR琴似駅の道路を挟んで向かい側に懐かしさを感じさせる煉瓦造りのチョコレートモダンな建物を改装した喫茶店でした。名前は「サッポロ珈琲館」です。

関心しながら目をキョロキョロしてますと、見覚えのある青い色のコーヒーカーップが在るではないですか!! そのカップにコーヒーをお願いしました。

テーブルに運ばれたコーヒーカーップは、紛れもなく私、阿妻一直・作のものでした。その瞬間に、熱いものがこみ上げてきてしまい、どうしようにも無く、しばらくの間くらえておりました。そうなんです、それまでは私の

器を地元のお店で見かけることなど皆無に近いほどでした。

「このオーナーは、どんな人だろう? 知りたい、会ってみたい、そんな思いが強く湧き上がっているところに、顔の丸い、ほっぺちやり体系のニコニコとした優しい顔の男の人が戸を開けて入ってきました。

「この方がお店のご主人・伊藤栄一さんで最初のご対面でした。

この伊藤さんとの出会いで、新たな方向へと発展して行くことになりました。

次回は、新たな出会いと陶芸教室の事などを掲載します。お楽しみにお待ちください。

（会員募集）

### 札幌焼・八軒窯陶芸教室

午前10時～午後4時（木・金）  
午後4時～午後9時（火・水）  
入会金2,500円・月謝（5千円・  
ねんど代1kg千円）

札幌市西区八軒1条3丁目1-63  
（サッポロ珈琲館3F）  
TEL 080-4046-0447